

われわれの生活を支える車の両輪：社会保障と雇用政策

やまだ あつひろ
山田篤裕

経済学部 教授

コーナー名の通り3年の報告には教員以外に4年が輪番制でコメントをつけ、「半学半教」の歴史を受け継いでいます。3年（6期）17名、4年（5期）18名が在籍しています。

人生のさまざまな場面での生活不安を取り除き、生活を保障するのが社会政策です。生活不安はさまざまな形で現れます。稼得者の死亡、失業、育児介護、傷病、障害、高齢などで所得が落ち込んだ際あるいは必要なサービスが発生した際、それに対応する社会保障が存在します。また働ける人は働くことにより健康で文化的な生活が維持できるよう、雇用政策が存在します。

これらの政策が社会政策であり、われわれの生活を車の両輪のように支えています。研究会では、この社会政策を、データに基づき評価しています。

日本の社会政策はいま二つの課題に直面しています。一つは現役世代の社会政策をどのように充実させるのか、もう一つは増大する社会保障費の財源をどのように世代内・世代間で負担するか、という課題です。とくに先進国中、日本は貧困率が高く（とくに母子世帯の貧困率は先進国中、最悪）、低所得層の所得が伸びず、所得格差が広がっています。働いていても経済的に

自立できないワーキング・プアの存在、正社員と非正社員の賃金格差、雇用保護・失業リスクの格差、訓練機会・社会保険適用の格差、若年・中年層での非正規雇用の拡大、若年失業率の上昇などを背景に、第一の課題がとりわけ重要になっています。

こうした課題は、一制度の改革では事足りず、社会政策という大きな体系を俯瞰し、全体的な整合性を取り解決していく必要があります。また財政的な維持可能性ばかり強調されるあまり、社会的な維持可能性の問題がおろそかになる状況は避けなければなりません（実は先進国中、日本の高齢化率は最高ですが、経済に比べ社会保障が相対的に小規模なことは、あまり知られていません）。

多くの学生は、就職し、家族を持つ、という暮らしを当たり前と想っています。それがいかにもい前提の上になり立ち、社会政策がどのような役割を果たしているか、研究を深めるとともに、自分に身近な問題として捉えてもらえればと思います。

山田ゼミの実際

みやわきけいじ

宮脇恵一君 経済学部4年

友人からよく言われる一言「山田ゼミってエグそう」。研究に相当力を入れているという意味で、あながち間違いではないです。例えば研究の進捗報告の際などは、ゼミ生は戦々恐々です。先生からは、少しでも文献の読み込み不足や曖昧な論理があれば矢のように指摘が飛び、発表方法にまで細かな注文がつくからです。ゼミ生はうなだれ、再び図書館やPC室にこもることになります。

とは言いつつも、ご家族とダイエットコーラをこよなく愛する先生の場を和ます軽妙な語りや、個性豊かで愉快なゼミ生たちによって、普段のゼミは穏やかな雰囲気です。そして気がつけば、厳しいご指導とゼミ生の頑張りによって研究が磨き上げられている……。要するにいいゼミなのです。



脳とこころの謎に迫る

三村 将
みむら まさむね
医学部 教授

精神・神経科学教室では、こどもから超高齢者まで、ストレスから認知症まで、果てしなく広がる「脳とこころ」の謎に多くの研究者がそれぞれの視点で取り組んでいます。

私が約20年ぶりに慶應義塾に戻る直前に東日本大震災が起こりました。被災者へのこころのケアは今でも大きな課題として続いています。その年の夏

に、厚生労働省はがん・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病という従来の4疾病に精神疾患を加え、5疾病として位置づけました。体とこころは密接に結びついており、こころの問題は私たちの生活に大きな影響を及ぼします。こころの問題、そしてその基盤にある脳のメカニズムを理解することは、現代ではますます重要になっています。

「脳とこころ」の謎に迫るアプローチは、患者さんに質問をしたり、脳の画像を撮ったり、試験管を振ったりなど、多岐にわたります。これらは大きく、患者さんを対象とする臨床研究と、実験動物を用いる基礎研究とに分けられます。

臨床研究は精神疾患の診断技術と治療精度の向上を目的としており、実際に患者さんから学ぶことがとても多いです。研究をデザインするスタッフ、

実行する大学院生、そして患者さんによる、言わば三者の協働作業です。

一方、基礎研究では、マウスなどの実験動物でこころの問題にアプローチできるのでしょいか。マウスは言葉で話しませんし、相手の表情から気持ちを忖度するといった高度な社会認知もマウスでは観察できません。しかし、言葉を介さない行動はたくさんあり、その行動の裏にある脳活動がマウスと人間とでよく似ている場合があります。恐怖・うつ・不安は、危険を回避するという生物の生存に共通の行動様式とその破綻としてとらえやすく、実験動物でも態度でその変動が見てとれます。マウスでは遺伝子を操作することや細胞を操作することができるので、単なる観察、推測を超えて現象の因果関係を調べることが可能になります。当教室ではうつや不安を対象に、その成り立ちから回復過程までを射程に入れて、分子・細胞レベルでの解析を進めています。

光を使った脳細胞の操作

よし だけい たろう
吉田慶多朗君 医学研究科修士課程1年

私は現在、精神・神経科学教室の生物学的精神医学研究室で、マウスを用いたうつ病の神経回路を明らかにする研究に取り組んでいます。脳の活動を記録するだけでは観察の域を超えません。私は光を使って狙った細胞の活動を操作する技術「オプトジェネティクス」を用いて、脳の神経活動に直接介入して、脳の活動とうつ病の関係を明らかにしようとしています。

オプトジェネティクスは最先端の技術であり、毎日が新しい発見の連続です。まだまだ工夫の余地があるため、私のような駆け出し研究者のアイデアがチームで採用されることがあります。チームに貢献できる喜びを学生のうちから味わえるので楽しくて仕方ありません。

